
屈神社

おごまめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風神社

【Nコード】

N4351A

【作者名】

おごまめこ

【あらすじ】

貴方は風神社を知っていますか？風神社　そう、そこはとても、とても素敵な所です。

第一伝：バッグ・真っ赤な。

皆さんは 風神社 という現象を知っていますか？

貴方は知らなかったのですね。

そうですね、いつか出会えるといいですね。

私はもう二度と会いたくないですが。

私は、ある日買い物に出掛けたんです。

いつもの商店街をゆつくりと歩き、目的のデパートへ向いました。

この道はいつも人通りが比較的多く、車の行き来も激しいので私は嫌いなのですが、そんな理由でデパートの大安売りを見す見す逃す手はありません。

とにかく前方から来る人に気を付けなければ。ぶつかったら大変なもの。

そう考えていると、自転車が突然走ってきて、私の横を通りました。そして私が持っていた大事な通帳や印鑑・財布が入ったカバンを物凄い力で奪い取ると、猛スピードで逃げていきました。

元々気の弱い性格です。それに、こんなに人が居るのに…

何が起こったかすぐには理解できず、ただ呆然と疾走する自転車を眺めていました。

そしてふと我に返り、すぐに叫びました。

「ど、どろばお！」

しかし、もう自転車は随分遠く。

私はもう取り返すことより、取られたことを家族になんて言おうかと考えていました。

今月分の生活費、マイホーム建築の為にコツコツ溜めたお金、全部持っていかれてしまった。

そう考えると今にも倒れそうでした。

すると突然、辺りがぐるぐると回り始めました。

貧血でも起こったかな。

とりあえずしゃがんだ所、地面は回っていないことに気付きました。

景色、そう景色だけがだんだんと姿を変えていきます。

気付けばそこは、深い緑に囲まれ温かい木漏れ日が差し込む田舎の神社でした。

不思議と私は、そこに居ることに何の疑問も抱きませんでした。気分は至極穏やかで、先程の事などもう忘れていました。

しばらく、緩やかな風に身を任せていると神社の中から一人の少女が出てきました。

巫女さんでしょうか。

体、顔は中学生か高校生ぐらいの可愛らしい女の子でしたが、その体からは想像できないような威厳がもし出されていました。

少女はゆつくりと神社の階段を降り、私の前にきました。そして、しばらく私の眼を見つめた後こう呟きました。

「ここは風神社。貴方を助ける為に存在し、貴方を陥れる為に存在する。問おう。貴方は何を今願う？」

少女は表情一つ変えず、ずっと私を睨み続けます。

私は、言葉の意味を考えました。考えましたが、何故か冷静で居られません。

恐怖と欲望が同時にやってくるのです。

先程までの落ち着きはなくなり、緩やかな風が冷たい風に感じ、木漏れ日が身を焼く様に私を照らし、木々は私を飲み込まんばかりにザワッザワッと揺れます。

そうだ、望み……さっきの引ったくり……返してもらおう！

私は頭から出てくる沢山の欲望を押さえ込み、そう願いました。

少女はニコリと冷笑を浮かべ階段を昇りました。

私は何も喋っていませんでしたが、不思議と思いが伝わったような気がしました。

「貴方の願い、受け止めました。私が言うことはありません。」

何故か最後の言葉がとても、そう、とても冷たく、心に刺さるように響きました。

気付けばそこは先程の商店街。バッグもちゃんと私の手の中。

いつもの商店街をゆっくりと歩き、目的のデパートへ向いました。

この道はいつも人通りが比較的多く、車の行き来も激しいので私は嫌いなのですが、そんな理由でデパートの大安売りを見す見す逃す手はありません。

とにかく前方から来る人に気を付けなければ。ぶつかったら大変なもの。

そう考えていると、自転車が突然走ってきて、私の横を通りました。そして私が持っていた大事な通帳や印鑑・財布が入ったカバンを凄い力で奪い取るうとしました。

私は体ごと持っていかれそうなのを必死でこらえ、カバンを握りしめました。

しかし、男はならばと言わんばかりに力を出し、とうとう私からカバンをとりました。

すると男は勢い余って車道に飛び出して行きました。

気付けば男は原型を留めていないほど、酷い姿をしていました。

続けざまに轢かれ続け、もう身元の特定も難しいほどらしいです。

そして警察から私に手渡されたのは 鮮血で染められた真っ赤なバッグでした。

第二伝：おかね

これは私の息子・しょうたの話です。

風神社のお陰で、きつと幸せになったと思います。

でも、私は一生風神社を憎み、恨み続けます。

私の家は恥ずかしながらかなりの貧乏です。

それは、しょうたが三歳の時、夫が女と浮気しウチの全財産を持つて家出したことから始まりました。

私には兄弟と父母が居ましたが、兄弟4人姉妹3人という大家族。お父さんやお母さんには迷惑を掛けることが出来ませんでした。

そして、私は一人でしょうたを養っていくことに決めました。財産が一円もなかった私は、とりあえずパートを始めました。

しょうたには残っていたご飯や野菜を与え、私は一日一食の生活を送っていました。

しょうただけには、絶対不自由な思いはさせたくない。その一心だけで私は働き続けました。

しかし、時代は不景気。

どんなに頑張っても、家賃・税金でお金はどんどん飛んでいきます。世間がクリスマスでも、しょうたは一人でお留守番です。

本当に申し訳なくて仕方がなかったです。涙はもう枯れました。

でも、でも、一番辛かったのはしょうたが何も言わないことです。

この子はほとんど泣かなくなりました。

夫が居る時は沢山泣き、駄々をこね、そして沢山笑っていました。

しかし、しょうたは唯一私が泣いている姿を見ると一緒に泣きます。うわんうわんと大声出して泣くんじゃないんです。

静かに、ぼろぼろと涙を零します。

しょうたは分かっていたんです。

私がどれだけ頑張って自分を育ててくれているか。

しょうたに物をせがまれたことは、まったくと言っていいほどなかったです。

絶対にこの子だけは、絶対にこれ以上嫌な思いをさせるものか。

何度も　何度も　心に誓いました。

そんなこんなで、しょうたは小学校に上がりました。

兄から貰ったお下がりのランドセルに　はしゃぎ喜ぶ姿は、今でも眼に焼きついていきます。

しょうたは小学校に行くようになってから、日増しに元気になっていきました。

友達と遊ぶのは何より楽しいようで、その時のことを内職している私によく話してくれました。

本当に 本当に 幸せでした。

ある日、しゅうたは小学校から家への帰り道で、ちょっと寄り道をしました。

何もないのに周りをぐるぐると見渡します。

まるで、異世界を見るかの如く。

気付けばそこは深く、温かく、明るい森の中。

しゅうたは余りの出来事で、言葉も出ない様子です。

そうだよね、いつも狭い部屋にいたんだものね。

外で遊んであげなくて ごめんね。

しゅうたは前にある神社のほうへ導かれるように歩きました。

先程まで前にあったかなんて、覚えてません。

中から、高校生ぐらいの女の子が出てきました。

女の子はしゅうたを見下ろし、呟きます。

「ここは風神社。貴方を助ける為に存在し、貴方を陥れる為に存在する。問おう。貴方は何を今願う？」

こんな難しいこと、しろうたに言っても分かるはずがない。

しろうたはずっと女の子を見ます。

しろうた、好きなものを言いなさい。欲しいものを言いなさい。
今まで、今まであんなに我慢したんだもの。
ちよつとぐらい、我がまま言いなさい・・・

しばらくの沈黙…

突然、少女はニコリと笑いました。

そしてゆつくりと音も立てず、神社の中に入りました。

しろうた・・・

気付けば私は部屋の中。

もう外は暗いのにしろうたが戻ってきません。

嫌な予感がしたので、すぐに探しに行きました。
今すぐこの腕で、この胸で抱きしめたい。

何故かそう、強く願いました。

しゅうたの下校する道を走っていると、小さな人影がありました。
ランドセルのシルエットも見えます。

「しゅうた！しゅうた！しゅうた！?!」

叫びながら必死で走ります。

そしてそこには

私に差し出そうとするように

その小さな手に溢れんばかりの100円玉を乗せた

ランドセルと服を着た小さな地蔵が笑顔で立っていました。

第3伝く幸せの香りく

風神社：ああ…あそこか。

今若い奴らの間で噂になつてゐるんだつてな。
でも、皆知らないんだ。

あの神社に居る神は

俺は馬鹿だった。

周りに反発し、他人を困らせ、親に迷惑ばかりかけた。

家柄は比較的裕福だった。弟は勤勉で、愛想もよく、まさに優等生。
俺はそんな弟に劣等感を抱く、どこにでも居る、ちょっと外れた人間だった。

くだらない生活を続けていたある日、いつも一緒に居るツレからおもしろい話を聞いた。

『新しい変な宗教がこの街に出来たらしい』

詳しく聞いてみると、その宗教は極めて簡単らしく、自分の家にある物品を何でもいいので供えて、自分が、

『伝わった』

と、思うまで祈れば、必ずや願いが叶うという何とも在り来たりなモノらしい。

特に規約もなく、誰でも気軽に参加出来るらしいので、今夜適当な

モノを持ってお参りする事に決めた。

俺達はバイクの音をブンブン鳴らしその寺に向かった。

俺が持ってきたのは、一個のみかん。

偶然茶の間にあつたのを分捕ってきたもんだ。

どんなインチキ宗教か暴いてやろうと思ったが、次第に俺らの気持ち
ちは変わっていった。

それは、信者の顔つきのせいだった。

多少なりとも、宗教に入れば幸福感を得られたりするはず。

なのに、寺に崇拜に来る人たちは全員死人の顔だった。

どれほど、酷いことが行われているんだ？

俺達は、周りの人たちには迷惑をかけないよう、寺に乗り込んだ。

寺院の中はとても綺麗だった。

しかし、なんとも言えない不快感が俺達を襲った。

匂い？雰囲気？どれとも違う。疑問に思いながらも奥へ進んだ。

「入信のかたですか？」

気の弱そうな坊主が中には居た。

微笑みながらこちらを見てくる。悪者には見えない。

「いやよお、ちょっと様子をみてからはいろいろと思っていたんだけど
もよお。」

「他の人達、随分、ヤツレテやがんな？お前ら、物品は何でもいいとか言いながら、実は金目のものを要求してやがったんだろ？！」

「コラア！ハッキリしろや！！！！！！」

坊主は表情を変えない。

微笑みをやめない。

「さあ、手に持っているものを置いて望みを言いなさい。受け入れましょう。」

「こっちの言うこと聞いてんのかコラアアアアアアア！」

「余り、私に口答えするのは、良くないと思いますよ？後々・・・。
ふふ。」

「おお？！やっatarouじゃないか？！」

仲間の一人が坊主の胸倉を掴んだ。

坊主は不思議な笑みをいつそう深く浮かべた。

「がつあ！？」

声を上げたのは仲間の一人だった。

胸倉を掴んだまま、白目を向き、苦しんでいる。

「ふふ。どうやら効き始めたようですねえ。この寺院の特徴を、教えてあげましょうか。」

「ぐふああー！」

「ぐあっあ！」

「ぐぎああ！」

他の友達も全員一斉に声をあげはじめた。

「この寺に入った時、不思議な違和感を感じたでしょう？あれは、私が開発した幻覚剤を、素粒子まで分解、それを流した所為です。」

坊主は立て続けに説明する。笑みは変わらない。

「この幻覚剤は厄介で、過去、自分が体験した精神的苦痛、肉体的苦痛、すべてを織り交ぜて蘇らせるのです。まあ、30分…程ですが。」

「そして・・・その30分の間、何をするか・・・ふふふ・・・おや？」

俺は坊主を睨み続ける。

全身襲ってくる不快感、痛みは理解できる。

だが、このくらいで倒れるものか。

30分の間、こいつらを守って耐え、ここを出ることが出来たら勝ちだ。

仕組みをペラペラ話したのだから、警察に言えればいい。

「ほお。貴方はこの幻覚剤が効かないのですか？」

「てめえの好き勝手にはならねえよ。」

「随分、愛されて育ってきたんですねえ。」

「どういうことだ。」

「親御さん達は、貴方の育成に関わった者たちは皆、貴方のことを大切に育てたでしょう。だから、痛みも少なければ苦痛も少ない。まあ、ソレゆえにグレてしまうのも分かりますが。」

「うるせえ。。坊主を気取るんじゃないやねえ、犯罪者。」

「犯罪者…とは人聞きが悪いですねえ。商売人と呼んでくださいよ。ははは。」

坊主は、懷から注射器を出した。5本。ちょうど俺らの人数。

「これはねえ。先ほど幻覚剤を利用して作った、薬です。ルパン3世という映画を参考にして考え付いたんですが、これを射すと、この寺から流れる幻覚剤を一定期間内に吸わなければ異常な副作用が起くるといふ代物です。時間は個人差がありますが、まあ10日間、幻覚剤を吸わなければ、今、君の横の彼らが起こっている現象が1ヶ月続きます。それを乗り越えたら克服できますが、まあ、一般人は、無理でしょうねえ。」

「でも、君は別だ。」

坊主は表情を変えた。

「君は私の野望の邪魔となる。私はここら一帯を全て支配地域にするつもりだ。今度は快感の幻覚剤を作って、住民を快樂と痛みで支配するんだ。だが君は脅しの道具となる不快の幻覚が効かない。だから、幽閉させて頂くよ？はは。」

ここら一帯…俺のお袋や、親父や、弟もか？

駄目だ、させねえ、絶対。

それに、こいつらにそんな思いさせられねえ。

「うおおおおお！！！！」

俺は全力で拳をふった。

それは坊主の顔面にクリーンヒットしたが、ソレが罠だと気づくのは遅すぎた。

俺の繰り出した右腕に、坊主は先ほどの注射器を指していたのだ。

「ははは！一生、眠っていてください！！！！！！！」

どんどんとまぶたが重くなっていく。

坊主の顔をとらえている右手も、力が抜けてずり落ちた。

そこから鼻血を出している坊主が伺えるが、だんだん、ばやけてくる。

俺は気付いた。

俺は弟に羨ましがられていたのだと。

母親、父親の愛は、兄のほうが多いと、思っていたんだろう。だから、あいつは俺を抜く為に努力をしたんだろう。

ずっと分かっていたが、心から出さなかった、推測。でも、きっと事実。

俺は馬鹿だ。

親父やお袋をまた悲しませるのか。

俺が死んで、悲しむのならまだいい。

弟が、居るしな。

でも、これ以上苦痛は与えさせない。
何があっても。

今まで守ってきた分を、返さなければ。

俺は目を見開き、坊主を睨む。

ほとんどモザイクがかかって見えてはいないが、眼を逸らさない。

「こいつめ。本当にしつこいですね。さっさと眠ってください！」

坊主はもう一本、俺の腕に注射をした。

「いれぐらい……いれぐらい!!」

俺は叫び続ける。絶対に、負けられない。

これぐらい……！！！！！！！！！！！！！！！！

•
•
•

•
•
•

ほとんど白に近かったモザイクが、解けていった。

ああ、夢の世界に、来てしまったのか。

ああ……来て、しまったのか。

俺は。守れないのか。

どんなに体が大きくなったって、守れないのか。

俺は地団駄を踏んだ。

こんなところであきらめねえ。

皮肉だが、あの坊主のおかげで気付いたんだよ、親から貰った愛に。

俺は、受けた愛と与えた苦しみ、全部清算しなきゃなんねえだよ！
！！！！！！

良く、周りを見てみると、ここは寺院じゃなかった。

神社・・・かな。

考えていると、中から女の子が出てきた。

美人だがちつと幼いな。

『ここは風神社。貴方を助ける為に存在し、貴方を陥れる為に存在する。問おう。貴方は何を今願う？』

坊主の次は、巫女か。

どちらを信じればいいものやら。

笑えてくる。俺にはもう願うしかないんだな。

どんなに粹がたったって、小さいんだよな、人間って。

「俺を陥れるってのは、どういうことだい？」

『さあ。時にはお前自身から、または周りを失わせ、時には苦しませ、時には幸福という苦痛を与えるときもある。』

「そうか。後ろ二つは一向に構わないんだが、失わせてはいけねえもんが、あんだよ。どうにかならないか？」

『貴様は勘違いしている。』

「は？」

『神は、お前らのものではない。』

そうだな、そうだ。

俺の都合がそう通るわけがない。
力が全てなんだ。俺は無力、相手は強大。
恥を捨てて、祈るしかないんだ。

はは、悲しいねえ。

「すまなかった。じゃあ、願いを言っぜ」

『謹んで聞こう。』

「俺が受けた、沢山の幸せを、皆に返してほしい。俺は、悲しみだけ持っていきたい。きつと残る悲しみは、受けた幸せを仇で返してしまつた罪悪感だけだから。」

『ふむ。』

「そしたらさ、俺さ、他の奴らに、今度は幸せを送れる気がすんだよ。きつとこれからの人生、俺は満足に生きていけると思うんだ。」

『寺院の件は、いいのか。』

「俺の幸せは、あんなもんよりずっとずっと大きい。きっと消えてしまっさ。」

『貴方の願い、受け止めました。』

彼女は優しい笑みを浮かべた。
坊主のソレとは、比べ物にならないほど。

なんだろうな、この感じ。
幸福感で、満たされていく。

さて、頑張ろうか。

...

「ん？」

「ふわあ。。」

「な、なにが？」

「すげえ、怖い夢を見てたよ、俺。」

「おお、俺もだよ俺も。」

「マジか、お前らもかもよ。」

「ってか、あの糞坊主はどこいった?!」

「いねえ、俺らが痛いところ突いたからトンスラしたんじゃないの

か。
」

「はははは
」

「それにしても。いい、匂いだな。」

「ああ、なんだ、この匂い。」

「すつげえ、優しい、みかんの匂いだ。」

その香りは、寺院を飛び出し、一帯を淡いオレンジ色に染めた。
皆、目を瞑って、こう思ってくれたんだ。

すつげえ、幸せな、みかんの匂いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4351a/>

風神社

2010年10月26日05時44分発行